福岡県文化会館美術館ニュース・14　ふくおか文化

1975
9.20
NO.30

古賀春江回顧展特集号

古賀春江を想う

坂　宗一

詩人や絵かきで急進的な前衛派には能弁家が多く是が非でも相手を論破しようとするが、当時前衛派だと思われていた古賀さんは、全然そんな風ではなかった。彼が誰かと議論するのを見たこともなかった。若い人々が随分出入りして絵の話になっても、ほとんど彼は聞き手に回って、例えそのまま賛成しにくても、別にこれに異をとなえることもなかったようだ。

この気質は、他人の作品の批評の場合にも現われた。私がまだ描き始めで形にもならぬ絵を、それでも懸命に描いて坂本先生に見て貰うと、空の左肩上の空の二寸角程を指して、ここだけ絵に成っているが外は駄目だ、と一言ピシリといわれた。これが古賀さんの場合だと、「何か考えているが、まだそれが現われないのだ」といった。私が古賀風に真似て少年像を描いた時も「あんな絵を描いては困るナ」といっていたと人にいわせて止めさせた。

こんな古賀さんの中身は、本当は熱っぽかったが包んでいる包装紙がやわらかかった。

一面、大変な照れ屋であった。これは夫人の笑い話だが、彼女の親元に行って庭先からの挨拶だけで帰ってしまった時のこと、その家では珍客を迎えて座敷にあがってもらいたいのに、彼は嫌がって、ついに皆が手を取って引きあげようとしても、お縁の柱にしがみついて結局あがらなかったという。

周囲の反対を押して、好江夫人が東京の古賀さんを追ひ、一緒になった事情もあって、恐らくはじめてのこの訪問には、何かと間の悪るさもあっただろうが、馴染まないと解け合いにくい神経質な春江さんがこの工合悪さを、柱を楯に頑として照れかくした気持が私にはよく分かって、いつまでも忘れられない面白い話だ。

とにかく、人なつっこい人柄であったから誰からも好かれ、訪う人も多かったが、彼の方から積極的に知人を持とうとすることはなかったようだ。しかし、初期の水彩画研究所時代の小山氏や赤城氏等と電車に乗り合わせたりすると、顔一杯喜びの情を現わしてなつかしがった。

川端康成氏は、彼の生活を隠遁的だと書いていたが、一応その通りの姿だったが、決して外形だけが、すべてではなかった。薄暗い広い寺の中で物静かに育ったのが、その原像を造ったということも考えられると思う。しかし、いずれにしても画家としての活動は決してそんなものではなく、次々に激しく変転した。そのことで、「問題を強いられているようで好きになれない」と小林秀雄氏もいっている程、短かい生涯を忙しく、大至急に走って行ったと私は考える。もし、もっと永く、ゆっくりした時間があったなら、聡明な彼は熟考しながら自然に変化して、小林氏の好感も得られたかも知れない。

私はその頃、根津権現坂の下宿にいて、三日もあけず巣鴨に行った。

古賀夫妻にも折々喧嘩はあった。ある時、玄関を開けると、いきなりそこに気色ばんだ二人が立っていた。私が困ったのは勿論だが、素知らぬ振りで通るわけにも行かぬものを感じて割って入ると、古賀さんが気負って叩きに出

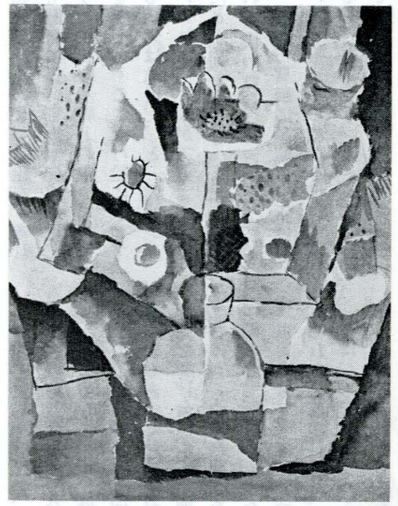
「観音」　(大正10年　油彩)

た。その時、夫人は私の腕をつかんでいたが素早く身を引いて避けた。それはよいけれど、私の腕も引張ったので夫人の頬のあった場所に私の頬があることになり、一瞬にして彼は私を打ってしまい、三人いっしょに驚いて、喧嘩は形に成らなかった。二階にあがると、夫婦げんかなんかに入るもんがあるか、しかし痛かったろうと詫びるようなことをいった。

古賀夫人は粋な美人で、気風も下町がかっていた。櫛巻を無造作に赤珊瑚のかんざしでしめたりして粋な風情の姉御であり、古賀さんは随分夫人に我がままだったが、この我がままな駄々児を守ってやる形だったが、一人の男を自分がこの手で世の中に出してやったという自信が言葉の節々に読まれた。夫人の苦労もその自負に支えられ耐えていたのだと思う。

「古賀夫人像」　（大正14年以前　水彩）

何度か喧嘩をすると、夫人は私の下宿に来て、ただ何となく一日本を読んだりして日暮れ頃、帰ることがあった。最後に来た時は雑誌等を風呂敷包みにして二、三日は頑張る勢であったが、しかしやはり日暮れ近くになると意地も弱り、雑誌を包みかけた。そして、「こっそり行って春江がどうしているか見て来てくれないか。ただし、私がそういったといわないでくれ」と、釘をさすことは忘れなかった。行って見ると、暗い二階の仕事場の隅の椅子にかけて彼は静物用の葡萄をむしって食っていた。蚊がワンワンうなっていた。私が帰ってこのことを報告すると、むっくり起き上がって階段を馳け降り、下駄を突掛けるのももどかしく、音を立てて権現坂を小走りに降りて行った。持物はみんな放ったらかして。



「花」　（大正15年　水彩）

これが最後となったのは、このあとの一ヵ年半を朝鮮、満洲の旅行で私が東京を出たからである。この旅の印象は私には、激しいものであったが、文字通り無銭旅行であったので、楽しみも苦しみも鮮烈な思い出として残った。旅先から送った二科への絵は出来が悪く、古賀さんに苦労させた。その旨の手紙を受け取って急いで帰ってきたのだが、古賀家の様子はすっかり変っていた。

駒込動坂に移転していた古賀家の玄関上の窓に、古賀さんの顔が見え、見知らぬ娘達が私を見下ろしている。横の柴垣では、赤いリボンを首に巻いた烏が止まって私を見ている。下の庭に真っ白の中型の秋田犬が寝ていた。お座敷に通ると豪勢な白木の樫がすえてあって、中を覗くと蒲団の上にブルドッグが眠っている。夫人の話で今病気中だとのこと、玄関横の小部屋に生白い娘がすんなり座り、これが夢二描く少女で、何かといえばすぐ泣くのよ、と夫人がいった。何も彼も呆気に取られて二階にあがると、古賀さんは娘達に取りかこまれて置きこたつに足を入れていた。膝の神経痛がひどいので温める外にないといいながら、一年半に及ぶ私の無銭旅行の話を聞いてくれた。

久留米から上京した坂本繁二郎氏の歓迎会（昭和5年9月）

左より1人おいて高田力蔵・坂宗一・2人おいて坂本繁二郎・古賀春江の各氏

「風景」　（大正15年　油彩）

彼が面白がったのは、私が北鮮の小さい町で挙動不審で警察に連行され尋問された時、私の放浪話を面白がった署長が、十円ぐらいにまけとけといって三、四人の巡査達に絵を買わせた一節であった。皆大笑いしたが、出品画の不出来については彼は半口もいわなかった。

私は目黒不動裏に室を見つけてそこに居着いた。競馬場の緑が美しく眺められたが、駒込には遠くしげしげとは行けなかった。行って見ても、取り巻く人々の顔ぶれが違ってしまって、すっかり画壇のスタームードが彼を包んで馴染めない一皮が出来ていた。夫人が「月六百円も掛かって大変」といっていた。

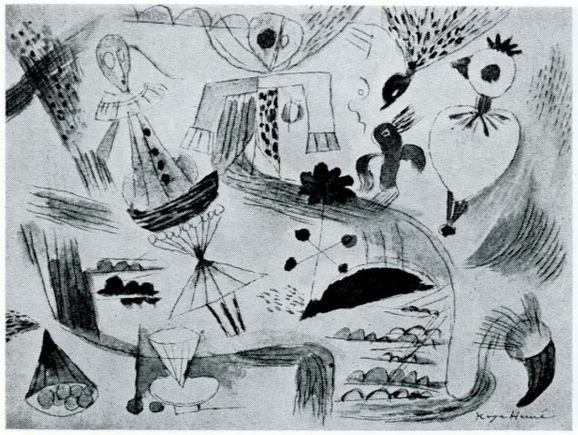
「感傷の静脈」　（昭和6年　油彩）

有名な詩人の出入りも多かった。横浜辺りの後援者からの依頼の絵を描かされて、私の顔を見ると頭の髪をかきむしって舌打ちして見せた。川端氏も夫人同伴でよく話し込んでいた。

夏になった。膝の痛みも軽くなったといってた頃、生家で義兄重病の報があった。古賀さんは百号一枚（「深海の情景」）を描きあげ、次の「サーカスの景」の荒塗りをした所で一人で久留米へ出発した。「サーカスの景」の荒塗りは、ただ画面一杯にエローカー等の絵具をいかにも荒っぽくつけてあるだけで、作者の意図は解きようもなかったのだが、郷里で突然発病して帰ったと聞いて行って見ると、乱雑に塗られていた無意味だった下塗りの色は、美しい空の色に変わり、先年神奈川あたりで興業したハーゲンベックの曲馬団の絵が出来かかっていた。発病したと聞いても、外見は日頃の古賀さんでしかなく、郷里の話も乱れるわけではなかった。門司で間違えて大分行に乗り驚いて飛び降りたくらいの失敗は、馴れない者は誰でもやり、決して異常な出来ではない。ただ、水の入ったコップを転がしたり、灰皿にやたらに火の着いたタバコを並べたりしたが、特におかしいことでもなかった。しかし病根は深い所で彼を浸していたのである。川端さんの説得で診察を受け、そして帝大病院に入った。誰でもいうように、すぐ帰って来る、と古賀さんもいった。

巣鴨のお座敷の柱で彼と私の背丈を計ったことがある。古賀さんが五尺二寸で私より一寸背高だった。夫人が柱に印をつけた。古賀さんは、いかにも嬉しげに「どうだ、坂君」と威張ってみせた。それが入院数日後、見舞った私を識別せず、

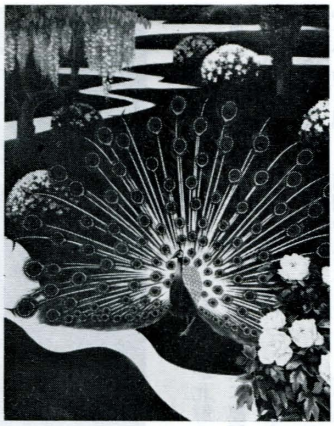
「誰か、この人は？　見たごたる人だが」と見詰めるだけであった。



「朗らかな春」　（昭和4年　水彩）

私は思わず涙をこぼしながら病室を出た。そのまま、高い熱の持続は衰弱し切っていた肉体と共に古賀春江を強引に死に引きづって行った。昭和八年九月十日、満三十八歳の生涯であった。

（二紀会委員　筑後市在住）



「孔雀」　（昭和7年　油彩）

「白い貝殻」　（昭和7年　油彩）

〈特別企画展〉

―詩情と幻想の世界―

「古賀春江回顧展」の開催

大正末から昭和初めに前衛画家として異彩を放った、久留米市出身の故古賀春江の回顧展を開催します。

古賀春江は、今日、前衛の先駆者、あるいは異色画家として日本近代美術史上に評価されております。

古賀芸術にみられる詩情と幻想性は他に類がなく、いわば、詩の絵画化を試みたところにこの画家のユニークさがあるといえるでしょう。多才であっただけに、画業半ばで夭折したことは惜しまれます。

戦後、古賀春江の展覧会は何度か開かれていますが、彼の画業の全貌が展観されたことはありませんでした。

生誕八十周年を記念する今回の回顧展は、これまで知られていなかった作品や資料なども加えて、多彩な古賀芸術の全貌を明らかにし、あらためて、その画業を再認識しようとするものです。

展観される作品の約半数が没後未公開の作品であり、古賀春江展としては画期的なものになります。

初期から晩年までの油彩（五四点）、水彩（七三点）、およびデッサンのほか参考資料として、ポスター原画、挿絵原画、スケッチブックなど（五四点）も併せて展観します。

古賀春江略歴

明治二八年　久留米市の善福寺に生れる。

大正元年　中学明善校を退学、絵を志して上京、太平洋画会研究所に入る。

大正二年　日本水彩画会研究所に入る。石井柏亭に師事。

大正四年　僧籍に入る。亀雄（よしお）を良昌と改名、呼び名を春江（はるえ）とする。

大正五年　宗教大学に入る。日本水彩画会員となる。

大正六年　第四回二科展初入選

大正七年　宗教大学を退学、画業に専念する。この頃から油彩画をはじめる。

大正一一年　第九回二科展出品の「埋葬」で二科賞受賞。二科展出品の若手作家らと前衛グループ「アクション」を結成。

大正一五年　二科会友となる。この頃から超現実的な詩を美術雑誌等に発表しはじめる。

昭和四年　シュール的傾向の作品を発表しはじめる。

昭和五年　二科会員に推挙される。

昭和八年　「サーカスの景」を絶筆として病没（満三八歳）。

会　期　昭和五〇年一一月九日（日）～三〇日（日）（無休）

会　場　福岡県文化会館美術館

主　催　福岡県、福岡県教育委員会、福岡県文化会館

入場料

一　般　三〇〇円（二五〇円）

高大生　二〇〇円（一五〇円）

小中生　一〇〇円（五〇円）

（　）内は団体（二〇名以上）の料金

「そこにある」　（昭和8年　水彩）

ふくおか文化　第28号
昭和50年9月20日発行
編集兼発行人　神山太道
福岡市中央区天神五丁目2の1
福岡県文化会館
TEL741859 1～5